

# 夏期 セミナーに 参加して

岡野 利映

この夏友人が、日本原子力学会主催の夏期セミナーで行われるパネル討論会に、私をパネリストにと推薦してくれた事から、参加させて頂くこととなりました。

結婚するまでの娘時代を某原子力発電所にて勤務しておりましたが、現在、OB会に参加する事もなく、原発立地の地元意識もなく生活しておりました。そんな私でしたのに、私は、長男が在学する高校でPTA役員を任命されており、時同じ頃、福井県県教育長との対話集会という場を設けて頂き、質問事項に原子力地元立地校としての工業高校、特色ある科の新設等と取り組んでおりましたので、急に興味がわいて参りました。

パネル討論会は、初めての経験で、何を話して良いのかも解かりませんでした。原子力リスクコミュニケーションの取り組み、地元女性と現場ワーカーの対話との題に沿って進めていかれるという事で、事前に頂いたアンケートには、私の思っている事を記入しました。

おりしも、関電美浜原発にての事故がおこり、死傷者のでる大変な事態でしたので、マスコミの取り扱い方も大々的なものでした。原発事故というのは、即、放射能汚染と結びつきます。事故というと、広島、長崎の原爆のキノコ雲を想像してしまいましたが、今回の事故は、蒸気ボイラーを所有している事業所なら有り得る事故のはずなのに、原発事故という事で取り上げられ方が随分違うのではないかと、という気持ちもでてきました。

実際、現場ワーカーの方も、あの日、たまたま自分は事故現場に行かなかったのを難を逃れたと話も聞かせてもらいました。そして事故が起こったのは、ボイラー建屋で、私達が敏感に反応する様な放射能漏洩等は無いとのことでした。

私はその頃、自分が携わっている仕事の中で安全と安心という言葉の違いを感じることがありました。安全、安全と連呼されても、安心感が得られる事、物でなければ、納得頂けない、安堵感を持って生活できる事が何よりも一番大事なのだと思わされました。私の場合は体の健康を考えての口に入れる物でしたが、体の害についてなら原発は最も影響ある物ではないでしょうか。

それならば原発事故がニュースで流れるときにアナウンサーは最後に、周辺の環境には影響はありません、と言い、締めくくられますが、環境モニタリングの数値は昨日と変わらず環境に影響は一切ないと、対比する物があって伝えられれば安心する気持ちになるのではないのでしょうか。

そんな中、小浜から参加のパネリストがふれた、原子力災害が起きた場合の避難の仕方やヨウ素剤の配布のされ方等、隣接する市の住民がこんな不安を抱いて生活をしている事を知りました。その事で県には、事故発生時の行動マニュアルという物がきちんとある事を知り、そのマニュアルに従って対応される事を改めて知り、知らない事で不安をかりたてている住民も、私を含め意識が薄い住民も多いのではないかと思います。

本当に安心して暮らす為には、原発はいらぬという事に結論づけられてしまうのかも知れませんが、今現在の電気の需要、経済面から考え、電気を使用できなくなる生活の方がはるかに不便で、原発に依存しなくてはならない現状を思うと、今一層の厳しい安全基準を設けて企業努力して欲しいという事です。この不況の中、経費節減の折から現場での声が上司にあがらない為に、従事者が危険にさらされる事が本当になのかと、美浜の事故を見て感じてしまいます。

些細な事でも従事者が安全でなければ、その周辺に暮らす私達の安全は守られないのだと強く感じました。

最後に、パネル討論会に参加し、反省や新たな事に気付かされた事等、大変有意義な時間を頂戴しました事に心より感謝いたします。



## ◆「原子力」から連想するもの

原子力発電に対する人びとの意識はどう変わってきたのでしょうか。「データが語る」の初回は、原子力安全システム研究所が、1993年から2003年までの10年間にわたって実施した「原子力発電に関する世論調査」の結果を紹介いたします。

この調査は、定期的な調査だけでなく、原子力に関わる事故・事件後のスポット調査を組み合わせて、事故や事件が世論に与えた影響をとらえているところに特徴があります。また、関西地区を中心に調査していますが、必要に応じて全国や関東にも拡大しています。

まず、あなたは「原子力」と言われたら何を思い浮かべますか、この問いに対する自由記述を分類した結果が図1です。全体の40%強の人が「発電・発電所・電気・電力」を連想しています。原子力には電源としてのイメージが抱かれています。次に多いのは、「原爆、戦争、核兵器」の25%で、4人に一人は軍事利用を連想していることがわかります。

一人の回答者が複数記述しているため、回答者ごとに肯定的イメージを書いている

## ◆ 事故で変動しやすい不安感

では、原子力施設事故の不安についてはどうでしょう。2002年の調査では、「非常に不安」が23%、「かなり不安」が27%、全体の半数の人が「かなり」以上の不安を感じています。さらにこの10年の変化をみると、図3に示すように、事故後の調査で「非常に不安」の比率が大きく変化しているのがわかります。1996年のもんじゅ事故2ヵ月後と、1999年のJCO事故2ヵ月後の調査では、いずれも「非常に不安」が10ポイントほど高まり、その後低下するといった同じようなパターンを見せています。JCO事故の場合、被曝した二人の作業員の方が亡くなられるという最悪の結果を招きましたが、それにもかかわらず、1年後の2000年には事故前の水準に戻っています。人びとの原子力への不安感は、事故の影響を大きく受け、また変化しやすいものだと言えます。

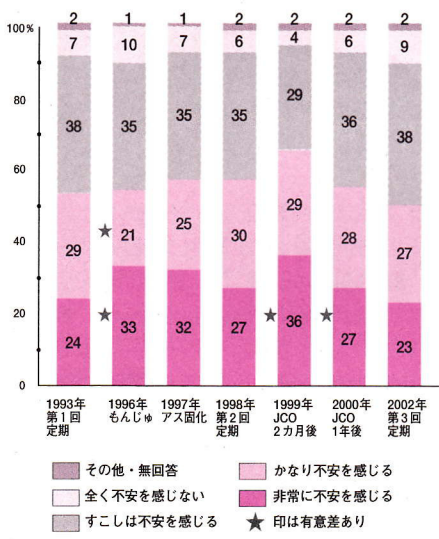


図3 原子力施設事故の不安の推移  
参考文献：原子力安全システム研究所・社会システム研究所編 2004年「データが語る原子力の世論」 プレジデント社

# 「データが語る」

## 原子力のイメージはどう変わったか？

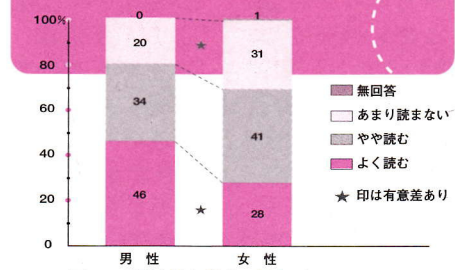


図5 新聞を読む程度 男女別

るか否定的なイメージを書いているかを整理し直した結果が図2です。半数を超える人が原子力から否定的なイメージを連想し、さらに全体の3分の1強の人は否定的イメージだけを連想していることがわかります。これらイメージには、10年間で大きな変化はありません。

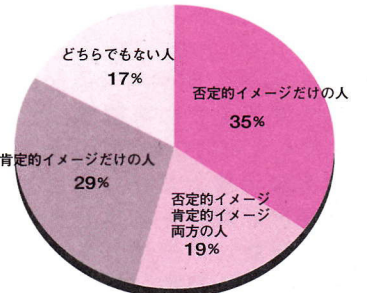
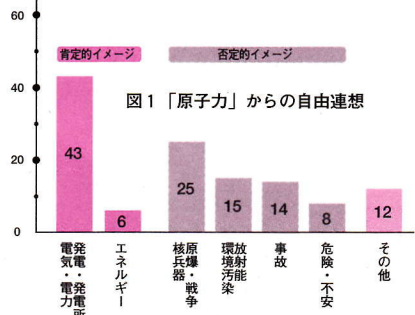


図2 原子力から否定的イメージを連想した人と肯定的イメージを連想した人

## ◆ 男女の知識差の背景にあるもの

世論調査では、一般的に男性と女性で顕著に違いがみられるものがあります。同調査の原子力関係の質問では、男女の回答に顕著な差がみられたのは、原子力発電について知っているかどうか、という質問でした。図4に示すように、男性では「知っているほう」が19ポイント高く、逆に女性では「知らないほう」が25ポイント高くなっています。この男女の知識の差は、マスメディア情報への接触の違い(図5)が大いに関係しているのではないかと分析されています。

しかし、重要なことは、男女ともに「知らないほう」というのが最も多い回答だということです。男性は全体の52%、女性は全体の77%が、「知らないほう」と答えています。原子力は、「積極的に知りたいとは思わない」ことのひとつなのかも知れません。しかし、日本で原子力は、電気をつくり出すために使われる重要なエネルギー源です。ならば「お金」のことも同様に、わたしたちが生きていくために知っておいたほうがよい知識だと納得がいきます。そのためには、素人にも、またどのような世代にも、まずはわかりやすい情報を提供し関心を呼ぶことから始める必要があると思うのですが、皆さんはどのように思われますか？

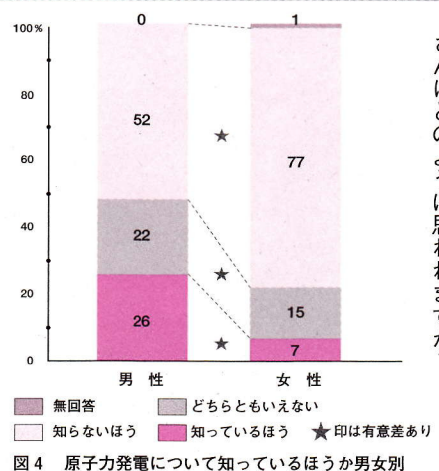


図4 原子力発電について知っているほうか男女別